

千石好郎著, 『ポスト・マルクス主義の形成と確立 : ポストモダン理論成立の背景(序説)』

園田, 浩之
中村学園大学

<https://doi.org/10.15017/3657>

出版情報 : 人間科学共生社会学. 4, pp.107-110, 2004-02-13. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン :
権利関係 :

〔書 評〕

千石好郎著

『ポスト・マルクス主義の形成と確立：ポストモダン理論成立の背景（序説）』

（2002年、松山大学総合研究所報）

園 田 浩 之

社会の変化につれて、特定の社会理論が、かつてならばもっていたのであろうその説明力を失っていくということがある。もとより社会学は、社会についての知であるのみならず社会における知でもあるのだから、ある理論の消失や生成はそれ自体、きわめて興味深い出来事としてある。「社会理論の領域では、マルクス主義からポスト・マルクス主義を経て、ポストモダニズムへと潮流が変化している。日本では、必ずしもこの流れは、十分になされているとは思えないが、グローバルには明らかにそうなっている。（本文改行）本研究は、この流れが如何に形成されてきたのかを追跡しようとする試みである」（p.1 以下、引用／該当箇所は頁数で示す）として始まる本書は、ポスト・マルクス主義からポストモダンの社会理論へ拡散する現代社会理論のパラダイム転換を展望すべく構想され、ダニエル・ベル、ミシェル・フーコー、リオタール、バウマン、ラクラウとムフらの検討へと続く全体構想のうちの前半、ベルとフーコーについての考察部分にあたる。

「マルクス社会理論の功罪を正確に評価し、社会思想史上のしかるべき位置に安置する必要があるだろう。その際に、近代の時期区分との関連でなされる必要があるのではなかろうか？」（p.1）と述べられていることから明らかなように、マルクス／ポストマルクス、モダン／ポストモダンの境界が交差するところに主題をしつらえる著者は、そうした視線の内部で、ポスト・マルクス主義への展開としてベルの思想遍歴を（本書第一部）、ポストモダンの社会理論としてフーコーの理論展開を（本書第二部）整理しつつ、それぞれの理論形成のなかにマルクスの問題構成とのつながりや切断を見出そうとする。

第一部に含まれる三つの章では、ベルの経歴とともに初期・中期・後期ごとにその思想が検討される。特に中期はポスト・マルクス主義の模索期として（第二章）、後期の理論展開はマルクス社会理論への全面的対決として位置づけられ（第三章）、脱マルクスへと転向するベルの先駆的な軌跡が、理論形成の背景となる社会情勢の変化とともに描かれる。とりわけ三章後半においては、マルクス主義における「明確な原典の欠如」と「主要概念の多義性」に対する批判と、その断片的で黙示録的な性格をもつマルクス主義社会理論がもはや〈マルクス主義〉社会を説明できなくなっているという判断がとりあげられ、マルクス主義を幻想として過去へと葬っていくベルの全貌が提示される（p.43-50）。

第二部に配置された五つの章では、英米圏や国内のフーコー研究をも参照しつつ、フーコーの思考が初期・中期・後期ごとに概観され、（もちろん、歴史、権力、抑圧（と解放）概念な

どに見出されるマルクスとの差異を視野に入れつつ) その展開があとづけられる。そうした作業の中から、「マルクスを超える」批判的分析の新しい様式、近代の超克、ポストモダンの社会理論の視座を抱懐するものとしてフーコーを見出す著者は、みずからの整理に依拠して、ウェーバーからベルへと続く「分裂的社会理論」の系統にフーコーを位置づけてみせる (p.67-71, および千石好郎著『〈近代〉との対決』を参照)。社会理論の展開を通覧し、そこに社会情勢の変化や理論的注釈を交えてまとめられた本書は、質量ともに相当なものである言説の数々を積極的に咀嚼しつつも、マルクス主義の歴史的経験を再検討し、その欠陥を摘出し、新たなパラダイムを創出しようとする著者の探求指針 (p. 3) に貫かれることによって、ひとつの見通しを与えてくれる。それでいて、ベルやフーコーのテキストはもちろん、著者が丹念にサーヴェイした内外の研究者による評価、注釈、批判、論評を編み込むように構成された本書には、正面から考察しようとするれば相当な紙幅を要するであろう論点の芽が、随所でいくつも吹いている。そのすべてを十分に検討することは、この書評の任務ではないだろうし、なにより評者の能力を超えた無謀なことでもある。それに本書は継続中の構想の前半部にあたる成果であるから、その行く末は開かれている。そこでここでは、本書の与える基本的な見通しに対して、ごく限られた (しかし本書の問題設定全体に関わるとも思われる) 論点のみを示すことで書評にかえたい。もちろん、それとてひとつの視点にすぎないけれども、何かに対する解答のようなものを本書に見出すよりは、いくらかは開かれた営みのように思われる。

マルクスからフーコーへ。このシフトはすでに社会理論のトレンドを示すものとして受け入れられつつあるひとつの指標であり、本書の構成をみれば判然とするように著者の論述もこの流れにそったものである。フーコーみずからが『言葉と物』という書物において、マルクスを十九世紀的思考の圏域になければ呼吸できない水中の魚に喩えつつ、それを過去の一部に位置づけるかのような叙述をしているくらいだから、主導的な社会理論の交代をすんなりとそこに見出すことができそうである。しかし、その一節のみをとらえて、フーコーが何か「知識社会的」な視点でマルクスを対象化しようとしていると早合点してはなるまい。ここに、1964年7月の討論会での報告をもとにしたフーコーの論考「ニーチェ、フロイト、マルクス」を挿入してみよう。そこでフーコーは「どのような解釈システム (*système d'interprétation*) を十九世紀が設えたのか、そしてそれゆえに、どのような解釈システムに、今日のわれわれが依然として属しているのか」 (*Nietzsche, Freud, Marx, in Cahiers de Royaumont, Philosophie t. VI, 1967, Paris, Éd. de Minuit, Dits et écrits I, p.565*) と問いかける。フーコーは、ニーチェ、フロイト、マルクスのなかに、解釈が最後にはそこへと至りつく「深層」の発見ではなく、解釈についての解釈、網目状に絡み合いつつどこに行き着くでもない解釈の始動を見出す。観察対象へではなく観察そのものへと回帰する観察。すなわちフーコーにとって、ニーチェ、フロイト、マルクスはいずれも、依拠すべき基盤やすべてを導く不動の原理を発見したという点においてではなく、閉じようとする特定の説明を脱臼させ、トートロジーから問いを解き放つ「中間地帯」を切り開くものとして重要なのだ。マルクスとフーコーのあいだには、

たんに社会思想史の前後関係として出来合いの歴史の中に回収してしまうならば見過ごされてしまう、奇妙な捩れのようなものがある。少なくともフーコーには、「マルクスのあと」や「近代を脱したところ」へみずからを位置づけようとしないうる慎重さがあり、評者は、両者を隔てる概念の数々によりも、そのような図式化を拒むこの異様な緊張の方に論じるべき事柄を見出す。そして、こうも考える。すなわち、ひとたび思想的に順序よく整理されてしまうならば見失われてしまうこの捩れの外にあっては、フーコーはもちろん、ともすればマルクスの核心をも外してしまうのではないかと。

なるほど、ある理論家のうちに前期／後期の時期区分を見出していきやり方や、複数の思想家を前後に配置する叙述には、見通しをつけ、論点の推移を説明するのに資する利点というものがあるには違いない。先行する知的遺産や同時代の知的営為との影響関係や対抗関係のようなものを思想史上にマッピングし、可能ならば、社会構造とのむすびつきを掘り起こしつつ知識社会学的な説明を加えることもできよう。しかし、そのような区分がひとたび「超克」や「脱」のプロセスとして語られるとき、そこには、わかりやすさをともなった（それだけに避けがたい）危うさもある。著者も採用する「マルクスからフーコーへ」という視点構成は、それが社会状況の変化に関連づけられて説明されるにせよ、何か本質的な問題の克服や解決として理論内在的に語られるにせよ——もちろん、こうした問題設定は具体的にはいくつもの論点を提示しはするのだけれど——つねに「盲点」を形成してしまう。時代区分という前提や、マルクス理論やフーコーの思想という、何かひとまとまりの説明体系の全体を独立して画定する、という前提がそれである。著者の描像が、マルクスとそれ以降、近代とそれ以降を思想的にあとづけるという視線に沿って展開される限り、脱近代への欲望を始めから抱え込み、みずからを宙づりにし続ける奇妙なシステムとして「近代」を思考しようとしたフーコーの苦闘や緊張は消去されてしまう。

ジャック・デリダがあるところで「(フーコーは)フロイトを位置づけたい、と同時に、位置づけようとはしない」と述べたとき、それはただフーコーの躊躇や判断の不備を評定しようとしているのではなかった。フーコーは、フロイト、ニーチェ、そしてマルクスのなかに、解釈の全体化を流産させる問いのかたちを、理論の地位そのものについての決定的な変更とともに見出している。しかしながら、すでに全体化されたマルクスと、すでに全体化されたフーコーとが、やはりすでに全体化された歴史の内部で発見され、並べられ、その断絶や連続が延々と語られ続ける。前後を判別し、それらに関係づけて説明する歴史外部の観察者は依然、無傷なままにとどまる。消去されつつ何度も再帰し続けるこの歴史外部的な観察者こそ、われわれの思考に刻印された近代なるものの縁取りであるのかも知れないのに、である。

この再帰はおそらく、フーコーやマルクスを一揃いの説明体系として受け取ってしまうわれわれの思考の慣性にむすびついているのだろう。マルクスやフーコーが見出したもののうちに大切なことはいくらかもあるのだろうが、その比類なき重要性は、すでにある何かに対する巧妙な説明にではなく、それまで自明とされていたものを、それぞれの仕方「謎」として見出し

た点にこそあったのではないか。彼らは価値や権力を、驚くべき謎として見出しつつ、むしろそれらを自明視する説明体系＝物語の方を解きほぐそうとする。生産関係であれ権力関係であれ、いちど「説明のための出発点」としてふまえられてしまうなら、もはや謎はなくなる。説明すべきものが説明するものへとたくし込まれていくことで、奇妙な折目が出来上がり、そこに、望むならば何であれ説明できる空虚な言葉が沈殿する。フーコーであれ、いずれは見え透いたものとなってしまふ。しかしここに、彼らの言説をすでにある何かへの説明として受け取り消費すること「以外」の方策を考えてみる契機も生じる。この契機こそ、先にみた既存の思想的理解のうちへと彼らを安置し、評定しようとする「正統」な作業の中で失われてしまうものなのではないだろうか。マルクスからフーコーへ。本書の提示するこの明晰な見通しは、じつに豊穡な知見を含んでいる。しかしむしろ評者は、その豊穡さのなかに、決して過ぎ去ろうとはしないマルクスと、未だ到来しないフーコーを見出してしまふのだ。

著者の学説史的サーヴェイは、社会理論の見通しを手にした者であれば誰に対しても、頼もしいガイドとなってくれる。かくも稠密な鳥瞰図を、誰であれただちに描きうるというものではなく、著者の該博な思想史の背景知が、それをはじめて可能なものになっているということは言うまでもない。

しかし同時に、そのような地図の描かれ方そのものに見出すべき問いがある。地図の不確かさが問題なのではない。それをいうなら、著者が本書で描いた地図は正確で、ありうる叙述のうちでも正統なものではあるはずだ。しかし、図法の何であるかによらず、およそ地図というものを描こうとすることのうちに生じてしまう歪みというものがある。近代について観察することが帰結する、不可避的な歪み。だとすれば問題は、その歪みを正すことではなく、むしろその歪みが示すものを可視化することではないのだろうか。そのためにも、地図は描かれねばならない。と同時に、歪みの結果であるにすぎないものによって、当の歪みを説明する（消去する）誘惑にも抗い続けなければならない。少なくとも評者にとって、フーコーを（そしておそらくはマルクスを）つうじてものを見るということは、そのように幾重もの戦略をとまなう探求であるように思われる。

おそらく、マルクスやフーコーを理解させてしまふと同時にそれを阻み続けている何かへも、接近してみるべきなのだろう。ほかでもない彼ら自身が、常識的な知見やわかりやすい（だけの）見通しに挑戦しつつ、貨幣や知の流通のうちに不可解なものを見出そうとした（そして、決して説明しつくさなかった）ように。見通しというものが与えてしまふ盲点と、それへの挑戦。マルクスやフーコーのテキストをつうじて何かしらを理解しようとすることは、それらのテキストがもつ不安定な部分を切り捨てないようにしておくことと別のことではない。それはしかし、本書が提示してくれるような見通しのあとからでなければ、見出しえないものなのである。